



おぎわら やすこ ●複数のアーティスト・イン・レジデンス事業に関わった後、INAX文化推進部、キュレーター・オフィスにて美術展の企画運営に携わる。2001年に企業メセナ協議会入局、顕彰事業「メセナアワード」、機関紙「メセナノート」、コーディネーター事業等を担当する

ビール業界4社 それぞれのメセナ活動

おぎわら やすこ
荻原康子

社団法人企業メセナ協議会
シニア・プログラム・オフィサー



宮城県大崎市の鳴子温泉で開催された「GOTEN GOTEN 2006アート湯治祭」のプログラムの一つ、「みんなで楽しむ音楽ワークショップ&ミニコンサートin湯沼」の様子。アサヒ・アート・フェスティバル2006の参加企画である

写真提供：東鳴子ゆめ会議

(注) メセナは「芸術文化支援」を意味するフランス語。1990年に発足した社団法人企業メセナ協議会は、日本における企業メセナの推進を目的として、①啓発・普及、②調査・研究、③情報集配、④顕彰(国際交流)、⑥助成認定を行なっている。④顕彰(民間企業) 149社、準会員(文化団体・行政関連団体等) 40団体(2007年4月現在)

「酒造メーカーは芸術文化支援に熱心ですよ」とは本誌編集部のご指摘である。確かに、企業メセナ協議会(注)の「メセナ活動実態調査」や顕彰事業「メセナアワード」に寄せられる案件を見渡すと、各地の造り酒屋が地域文化史の宝庫だったり、酒蔵やワイナリーでコンサートが開かれていたりする。本稿ではそのなかでも焦点を絞り、ビール業界を代表する4社について、そのメセナ活動を紹介する。

常に「未来・市民・地域」を考えるアサヒビール

今年、2007年は「スーパードライ」誕生から20年の節目にあたる。このヒット商品が世に出た当時の社長・樋口廣太郎は常々こう言っていた。「ビッグ・カンパニーより、グッド・カンパニーたれ」。1989年の創業100周年を記念して東京・墨田区に本部ビルを建設し、同時に(財)アサヒビール芸術文化財団を創設。そして、メセナの担当部署である企業文化部(現・社会環境推進部)を発足させた。以来、「未来・市民・地域」という3つのキーワードを軸に、積極的にメセナ活動に取り組む。

アサヒ・エコアート・シリーズ2006では、アサヒビール名古屋工場の水源地である木曾川流域で展開。特製の「撮影キット」で市民約350名が撮影した木曾川の写真を素材として、アーティストグループ「フィッシングダイアリー」が作品化し、同工場に展示した

撮影：ミソグチジュン 写真提供：アサヒビール株式会社

西洋美術作品が常設展示されており、企画展では気鋭の現代美術作家も登場する。前述の財団が運営を担うが、それとともに助成や顕彰（アサヒビール芸術賞）も実施。そこに通底するのは、やはり先の3つの視点だ。

社会環境推進部の根本ささ奈さんは、こう説明してくれた。①未来文化の創造に資する先駆的・実験的な表

だが、同社の芸術文化支援の歴史はさらに、初代社長の山本為三郎にまで遡る。濱田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチ―昭和初期に興った民芸運動の担い手たちを支えた足跡を京都の大山崎山荘美術館で知ることができる。同館には他に、モネ、ジャコメッティ、イサム・ノグチといった

現、②市民が主体的に参加する活動、③地域資源の活用、これらの方針に合致することを常に念頭に置きながらメセナ活動を進めていると。

その集大成ともいえるのが02年にスタートした「アサヒ・アート・フェスティバル」である。全国のアートNPOや市民団体とのゆるやかな協働により、毎年、夏の時期に実施されるアートの祭典。北海道から沖縄まで、商店街や遊休施設などを舞台に、地域の人々が参加する多彩なアートプロジェクトが各地で行なわれる。一つひとつは小さな活動かもしれないが、自分たちのまちを自分たちの手で、アートというツールを用いて元気にしようという実践が、地域を変えていくのだろう。

さらに近年、同部署として取り組む「環境」という課題に対しても、アートの側面からアプローチする企画を始めた。例えば森林の間伐材で楽器をつくるワークショップを行なったり、四万十川の上下流の住民が参加して、現代音楽家とコンサートを開いたり。これを機に、同社工場の環境活動と連動した「エコアート・シリーズ」も展開中である。

領域を超えるアートの試み、アサヒビールのチャレンジは続く。

お客様的身近なところにアートを届ける
キリンビール

大阪ミナミ、四六時中人々が行き交い活気にあふれるまち、そこを流れる道頓堀川のほとりにKPOキリンプラザ大阪はある。かつて映画館とビアホールで親しまれた「キリン会館」のあとに、87年、キリンビールが新しい文化の情報発信基地をめざして開設したものだ。高松伸の設計、建築学会賞を受賞した個性的な建物で、当初より「若手芸術家の支援」と「優れた芸術の多くの人への提供」を柱に、現代美術、映像、パフォーマンス、音楽など多岐にわたる催しを行なってきた。さらに05年からは「アートとビールの融合」とコンセプトも新たに、セミナーやトークショーなどを通じて、アートとビール文化の奥深さを伝えている。

同社のメセナ活動を見ると、先進性ある優れたアートを支援するという方針の先に、「お客様への提供」という意識が強くうかがえる。79年から10年間は劇団四季とのタイアップで「キリンミュージカルシアター」を全国公演、

↑キリンビールが行なっている「キリンダンスネットワーク・コミュニケーションイベント」の一環として、2006年にはダンサーの森山開次氏を招き、全国で親子向けダンス体験教室が開かれた

→「キリンニューイヤーコンサート」。東京交響楽団の特別演奏会にキリンビールが協賛し、今年で23回目を迎えた
写真提供：キリンビール株式会社

85年からは「キリンニューイヤーコンサート」を毎年継続して実施、いずれも廉価で楽しんでもらおうとの趣旨だ。KPOができ、90年には現代芸術の公募コンクールである「キリンプラザ大阪コンテンポラリー・アワード」(現「キリンアートアワード」)が創設され、

ヤノベケンジや東芋、大島佐紀子(日・アール・カオス主宰)ら、のちの活躍著しいアーティストを輩出してきた。さらに99年からは、現代舞踊の支援に重点を置き、劇場のダンスプログラムに年間サポートを行なったり、01年には朝日新聞社との協力で「朝日舞台芸術賞・キリンダンスサポート」をスタート。これは受賞作品のうち一作品に対して、ダンス公演の少ない地域での再演を支援するという趣旨で、先のアワードともども、より多くの人に同時代のアートを紹介するという姿勢は一貫している。

メセナを担当するCSR推進部社会環境室の中畑佐知子さんは、経営理念に直結したかたちでの活動を強調する。そのひとつの柱は「お客様本位」だ。お客様の身近なところで、いかにアートを届け楽しんでもらうか。そこで、04年から取り組むのが「キリンダンスネットワーク」である。全国各地の工場や同社関連施設にダンサーやカンパニーが赴き、参加型のコミュニケーションイベントを行なう。親子での参加者も多く、評判は上々。キリンビールとお客様との間で、新たなコミュニケーションのかたちが生まれている。

1996年7月に結成された混声合唱団「ガーデンブレイスクワイヤ」はサッポロビールによる支援対象団体。活動の本拠を恵比寿ガーデンプレイスにある恵比寿麦酒記念館に置いている

写真提供：サッポロビール株式会社
(下も同じ)

育ててもらった地域に貢献する サッポロビール

東京・恵比寿——「存じ」エビスビール」の商標が地名・駅名となったこの地には、1887（明治20）年より約100年にわたりビール工場があった。実に、10万平方メートルにおよぶ敷地面積である。この工場が千葉に移転するにあたり、1994年、跡地を複合商業施設「恵比寿ガーデンプレイス」として開発。サッポロビール本社を置き、文化施設や百貨店、ホテル、レストランなどを誘致した。そして、ビール醸造の足跡を辿る施設として恵比寿麦酒記念館を開設したのである。

サッポロビールの出自は北海道・札幌だ。明治政府が開拓使を設置し、さまざまな事業を展開するなかにはビール醸造が含まれていた。ゆえに歴史ある地に対する思いは深く、それとともに地域社会からの信頼も厚い。北海道では「ビールさん」と呼ばれるのがサッポロの社員だ。

同社の社会貢献活動は、各事業場が主体的に進めている。全社的な統括を担うCSR部長であり、恵比寿麦酒記念館の館長も務める端田晶さんは「地元で

育ててもらったという自覚をもって地域に貢献することが大事」と言い切る。工場敷地内にビオトープ園を設けたり、施設をギャラリーとして開放するなど、事業場それぞれの裁量で地域に根ざした活動が展開されている。

札幌では、90年にスタートした「パシフィック・ミュージック・フェスティバル」（PMF）への支援を継続して行なっている。指揮者の故レナード・バインスタインの提唱により始まったPMFは、国際的な音楽祭としてすでに高い評価を得ているが、それとともに地元住民にとつては、夏の恒例行事のひとつでもある。

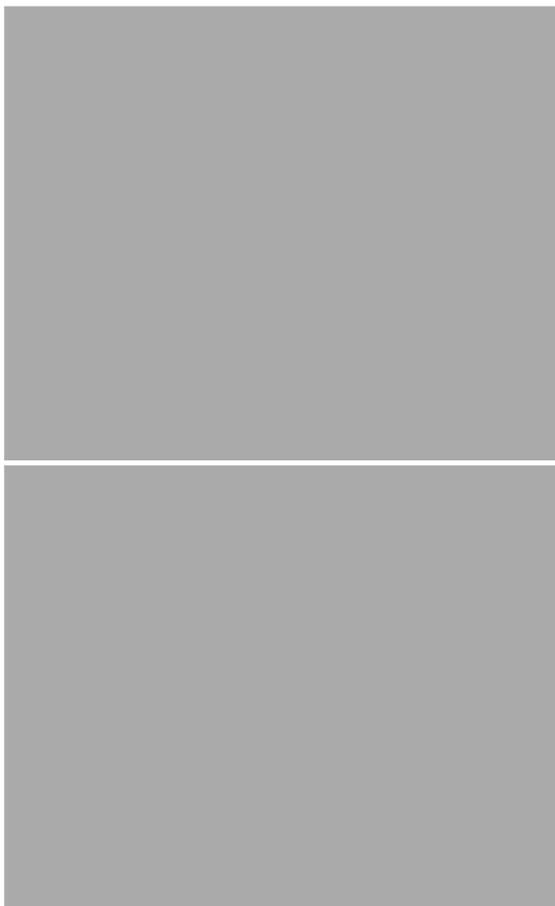
恵比寿麦酒記念館では、開館翌年の95年より「ミュージアムコンサート」を始めた。同施設の中央にある銅釜広場の残響が音楽ホール並みであることから企画されたもので、偶数月ごとに開催している。プログラムは

どれも独創的でユニーク、端田館長自らMCを務めることもある。

また、96年には混声合唱団「ガーデンブレイスクワイヤ」も誕生。社員も参加しているこの合唱団は、練習や発表の場として記念館を使い、いまや団員50名、年3回の定期演奏会をこなす

100年余にわたるサッポロビール恵比寿工場の跡地に建てられた恵比寿麦酒記念館にある銅釜広場では偶数月ごとにコンサートが行なわれている

←東京の新名所として話題の六本木・東京ミッドタウンにあるサントリー美術館。“都市の居間”として居心地のよい空間をめざし、カフェやショップ、茶室、メンバーシップ専用のサロンなどが設けられている
写真提供：©本奥恵三



〈上〉サントリーが創業90周年事業の一環として建設したサントリーミュージアム [天保山]。安藤忠雄による建築

写真提供：サントリーミュージアム [天保山]

〈下〉サントリーホールの大ホール。ウイスキーづくり60年、ビール発売20周年を記念して開設された。世界最大級のパイプオルガンを擁し、ステージを客席が取り囲むワインヤード（ぶどう畑）型の設計となっている。現在改修中で、9月1日よりリニューアル記念公演が行なわれる

写真提供：サントリーホール

までに育った。さらに銅釜広場の片隅には、1920（大正9）年にハンブルクでつくられたスタインウェイのピアノがさりげなく置いてある。予約をすれば試演もでき、音大生が発表の場に使うこともたびたびだ。地域に開かれた施設ならではの親近感、このオープンな姿勢がうれしい。

創業者の志を受け継ぐ文化・社会貢献 サントリー

日本における洋楽の歴史を振り返るとき、決して外せないのがサントリー

の存在だ。「世界一美しい響き」をめざして、1986年に東京初のコンサート専用ホールとして誕生したサントリーホール。この20年の間に、国内外から一流のアーティストを迎え、数々の名演奏で多くの洋楽ファンを魅了してきた。さらに遡ると、同社創立70年の69年には、鳥井音楽財団（現・（財）サントリー音楽財団）を設立している。日本における洋楽の発展を目的に、とりわけ「日本人作曲作品の振興」を掲げて、顕彰事業（サントリー音楽賞、芥川作曲賞、佐治敬三賞）や意欲的なコンサート事業などに取り組み、作曲家や演奏家、評論家そして聴衆に多大な影響を与えてきたのである。

そもそも、サントリーの文化・社会貢献活動の原点は、創業者である鳥井信治郎の「利益三分主義」の精神にある。事業による利益は「顧客へのサービス」「事業の拡大」そして「社会への還元」に使わなければならないとの信念であり、その考えは、続く佐治敬三、鳥井信一郎、そして現在の佐治信忠社長へと脈々と受け継がれている。

美術の分野においてもいち早く、61年にサントリー美術館を開設。「生活の中の美」を基本理念として、古美

術・伝統工芸を中心に国宝・重要文化財を含む約3000点の収蔵品を誇る。長らく、赤坂のサントリー社屋内にあったが、07年3月に六本木の東京ミッドタウンに移転。新たに「美を結ぶ。美をひろく。」のコンセプトで、日本独特の美意識を発信する場として、建築家・隈研吾の手により生まれ変わった。また、同社創業の地である大阪には、サントリーミュージアム「天保山」がある。94年に開館したこちらは、「アート&デザイン」をテーマとした企画展を中心とする複合文化施設である。さらにもうひとつ、創業80周年を記念して79年に設立したサントリー文化財団では、社会と文化をめぐる学術研

究への助成と、優れた人材の育成・支援を行なっている。特に、評論・研究活動の著作を顕彰する「サントリー学芸賞」は、学際的でユニークな研究に贈られることも多く、「人文科学・社会科学の芥川賞」とも称されている。

文化活動部の高倉健さんは、「創業以来、文化・社会貢献を企業活動の一部として取り組んできたこともあり、自然なかたちでそのDNAが社内に息づいていると感じる」という。また04年からは、音楽・芸術、環境・スポーツなどさまざまな分野で次世代育成支援に取り組むサントリー〈キッズ・ドリームプロジェクト〉をスタートさせた。「これからもさまざまな世代のお客

様に、たくさんの感動をお伝えしていきたい」。時代の要請に応えながら、創業者の志は今後も引き継がれていくことだろう。



4社それぞれのメセナ活動についてご紹介したが、いかがだろうか。本シリーズ「文化による都市創造」の観点から見ても、各社のメセナによって多くの人がアートと出会い、地域の個性に即した取り組みや文化拠点の形成などで、まちを豊かにする推進力となってきたことはおわかりいただけると思う。さらに今後も、各社のメセナがますます充実し、創意工夫に満ちた活動が展開されることを期待したい。☺